



粕谷祐子（編著）、『アジアの脱植民地化と体制変動——民主制と独裁の歴史的起源』白水社、2022、487+xxiip.

強烈な個性をもった指導者、よくできたドラマのような革命へのノスタルジア。政党政治、議会制、官僚制、そして軍人、事務員、地方の有力者たちなどの新しい階級に対する幻滅……また、かつては植民地支配の単なる結果にすぎず、植民地支配が終われば消滅すると考えられていた社会的、経済的、政治的な問題が、実はそれほど浅い所に根があるのではない、ということがしだいにわかっていくにつれ、そこから暗いムードが少なからずわいてくる。[ギアーツ 1987: 76]

本書を紐解いた時の最初の印象は強い違和感だった。編者は序章からこう断言する。「アジアにおける政治体制の多様性についての体系的な検討は、これまでほとんどなされてこなかった」(p. 21)。しかし、本当にそうだろうか。例えば文化人類学の泰斗、クリフォード・ギアーツが冒頭の一文を書いたのは1971年。彼の主たる研究フィールドであるインドネシアでは、既に4年前にスハルトらの実権を獲得する事件が勃発し、権威主義的な体制が確立していた時期である。

しかし、このようなアジア諸国の状況は、当初の予測とは大きく異なるものだった。何故なら、1947年のインドを嚆矢として次々と独立を果たしたアジア諸国の未来は、当初は、希望に満ちたものに見えていたからである。長い植民地支配の終わりにより、自らを取り巻く環境は劇的に改善される。多くの人がそう期待した。

しかし、ギアーツがこの一文を書いた70年代初頭には、アジアを巡る楽観的な空気は一変してしまっていた。とりわけ長い経済的低迷と政治的混乱により、独立後のこの地域の社会的雰囲気は一変し、「アジア停滞論」が再び叫ばれるようになっていた。

だからこそ多くの研究者は、何故に脱植民地化

後のアジア諸国がこの様な事態に陥ったのか、そしてその運命が何故分かれたか、について熱心に研究した。先に示したギアーツの文章はその1節であるが、この問題についてより包括的な分析を試みたものとして知られるのは、Myrdal [1971]であろう。ミュルダールは同書の1巻において実に300ページ近くを割いて、インド・パキスタン・セイロン（当時）、そして東南アジア諸国の脱植民地化後の「政治的問題」について詳細に描写した。政治状況に特化した同じ時期の著作としては、Albertini [1971] を挙げる事ができる。アルバティニは、同書の第3章に「比較に向けて」という1章を設け、英仏のみならず他の欧米諸国の植民地であった国々との詳細な比較を試みている。

脱植民地化後の体制移行、とりわけ権威主義体制への移行が、熱心に議論されたのは、各地域における政治研究でも同じであった。注意すべきは、脱植民地化後の権威主義体制化という問題に関わる各国研究の多くが、「何故に他国と異なる状況に至ったのか」、という関心をも有している事である。この点については、評者 [木村 2003] も嘗て、アジア諸国を比べる形で、韓国の「権威主義的」体制化の事例について論じた事がある。とはいえ、この点について、韓国に関わる研究として最も知られるものを一つ挙げるなら、やはり、崔 [1996] になる。彼はこの中で、植民地支配末期に整備された日本の総動員体制こそが、他国とは異なる韓国の「過大成長国家」を生みだし、その結果として出現した国家と社会の力の均衡の崩壊こそが、韓国の権威主義体制化を齎したのだ、と議論した。つまり、彼はこれにより、植民地国家の「国家」としての資源動員力の違いこそが、その後の各国の体制の在り方を分ける事になったのだ、と議論した事になる。

この様な多くの先学が扱って来た問題に対して、本書は以下の様な構成により議論しようと試みる。最初に編者の執筆した序章が置かれ、その中で脱植民地化直後に成立した体制の在り方が重要である事、そして、その成立の過程こそが、大きな多様性を以て現れる事となったアジア各国の政治体制が分かれていった重要な分岐点であったという仮説が述べられる。

そして、この序章の後、アジア各国を二つのグループに分けて議論する。即ち、日本、インドネシア、マレーシア、フィリピン、ビルマ、ラオス、インド、パキスタン、そしてスリランカが「民主制」の側に属する例として、他方、韓国、北朝鮮、台湾、中国、タイ、ベトナム、及びカンボジアが「独裁」の側に属する例として、それぞれ詳細に紹介されている。

本書の本体とも言えるこの各国の事例は、それ自体興味深いものであり、示唆に富んでいる。しかしながら、その事は本書の問題提起それ自体が意味あるものとして成立しているかとは分けて考えられるべきであろう。最初に明らかなのは、本書の議論、とりわけその総論部分の議論が、これまで連続と続けられて来た、脱植民地化とその後の新興国に関する研究成果の多くを、等閑視している事である。既に述べた様に、脱植民地化後の体制を巡る問題は同時代のものをはじめとして、むしろ多くの先行研究が存在する分野である。にも拘わらず編者は「本書で焦点を当てている政治体制の形成という問題は、最近になってようやく体系立った研究が進んできた分析対象である」(p. 11)とも断言する。その理由が、不勉強な評者にはわからない。

そして、本書が評者にとって不思議に映る要素が更に幾つかある。一つは本書が乗り越えるべき先行研究として、Moore [1967] を挙げる事である。しかし、イギリスやアメリカ、フランスといった民主主義国と、ドイツや日本、更にはインドを比較したムーアの研究は、「脱植民地化」後のアジア諸国の体制変動を研究したものとは、到底、言う事はできない。また、本書は、ムーアが中心に置く社会階層の違いを以て各国の体制の違いを説明するやり方の限界を指摘した上で、自らが指摘した「制度」の重要性の優位を主張するが、このムーアの古典的研究における制度面への配慮の欠如は、1973年に出されたスコチボルによる書評 [Skocpol 1973] をはじめとして、既に幾度も指摘されている事であり、それが本書による新たな発見である、と言う事は難しい。

二つ目は、「脱植民地化」の扱いである。本書では植民地化を「外国の勢力がある社会集団を統治

秩序の下位に強制的に組み込むこと」(p. 25)と定義した上で、脱植民地化を「ある国外勢力の支配のもとに置かれていた社会集団が、その外国勢の軛から離れて独自の政府を形成すること」(p. 25)と定義する。そしてこの定義から、例えば、第二次世界大戦後における日本の主権回復の過程をも「脱植民地化」の一種だと位置づける。編者らは加えて、第二次大戦中に日本の「事実上の」軍事占領下に置かれたタイ、都市部を中心とした地域が同じく日本軍の占領下に置かれていた中国をも「脱植民地化」の範疇に入れて整理しようと試みる。

しかし、この様な本書の「脱植民地化」の扱いは、先行研究とは乖離がある。何故ならこれまで多くの研究においては、「脱植民地化」という用語は、政治面のみならず、社会や経済等の分野に広範囲に及ぶ、比較的長期の現象に対して用いられて来たものだからである。そしてその様な先行研究の理解の仕方には理由がある。何故なら、「植民地化」とそれによる影響が、政治面のみならず、社会や経済等の分野に幅広く、深く及ぶものである以上、そこから離脱する過程である「脱植民地化」もまた、必然的に長期に渡らざるを得ないからである。例えば、それを僅か7年足らずにしか過ぎなかった連合国による日本占領と比べるのはかなり無理がある。

加えて言うなら従来の「脱植民地化」の過程における政治的システムを巡る議論において、最も重要な役割を果すものの一つとされて来たのは、政治的アイデンティティの問題である。ほとんどのアジア諸国の人々は独立以前において、明確な国民的アイデンティティの確立に至っておらず、それ故、その在り方こそが、独立後の各国の統合の何如に大きな影響を与えて来た。だからこそ例えば、ギアーツはこれを巡る政治を「統合的革命」と呼び、その在り方の違いが、各国の政治社会を如何にして異なる方向へ導いたかを描写した。にも拘わらず、本書は脱植民地化とは無関係なムーアの議論に挑む一方で、これまでの先行研究が脱植民地化後の各国の体制成立において重要な論点として来たアイデンティティを巡る議論には見向きもしない。

以上の様に、本書の議論は全体的に「脱植民地

化」に関わる先行研究と距離のあるものであり、その独自の用語法により、分析枠組みの在り方も特異なものとなっている。それは恰も本書が、本来「脱植民地化」に大きな関心を向けていなかったにも拘わらず、何かしらの理由で付焼刃的にこの用語を挟み込んだ事の結果である様にさえ見えなくもないほどである。単に現在に至るまでのアジア各国の政治体制の違いを説明する為であれば、無理にここに「脱植民地化」に関わる議論を挿入する必要があったとは思えない。

そして、本書がこの様な形になったのには恐らく理由がある。本書は「脱植民地化」後に作られた「制度」が、その後の政治体制を決める決定的要因である、という歴史的制度論に基づく仮説をベースにするものであり、また、その中で各国の政治システムを分けた「重大な岐路」が持つ重要性をハイライトする意図で書かれているからである。

勿論、脱植民地化直後の政治体制は、その後の各国の政治体制を規定する重要な要素である事は明らかであるから、評者も編者らの仮説を無下に否定するものではない。しかし、本書には同時に自らの仮説に拘泥する余りに、幾つかの決定的な問題をも有している様に見える。一つはそもそも本書の言う様に、脱植民地化直後の政治体制の在り方が「重大な岐路」であったのか、という疑問である。例えば、評者の研究する韓国では、1952年に戒厳令が宣布された後、「建国の父」李承晩による個人独裁が続いたものの、この体制は1960年の所謂「学生革命」により倒れ、一旦は民主的な体制に移行した。周知の様に、更に1年後の1961年には朴正熙らによる軍事クーデタが勃発し、韓国は再び権威主義体制へと回帰する事になるが、仮にこのクーデタを歴史の必然であったかの様に言うのであれば、やはり単純化が過ぎると言わざるを得ない。

逆にビルマ、パキスタン、タイ、インドネシア等では、60年代以降の軍事クーデタ等による政治体制の変容が起こっており、ラオスやカンボジアでは共産主義体制への移行も観測できる。1980年代以降には、韓国や台湾等が民主化を遂げており、結局、何を以て本書が脱植民地化直後の状況のみを「重大な岐路」と位置づけているのかはよくわ

からない。仮に歴史的制度論に則って、ある時期を「重大な岐路」として位置づけて、各国を比較するのであれば、この「岐路」は他の類似のものより明らかな重要性を持つものである必要がある。仮に「重大な岐路」を超えた後でも、大きな自由度があるのであれば、それは精々「一つの岐路」にしか過ぎず、わざわざ大仰な言葉を使う必要はない様に思う。

既に述べた様に、本書の大部分はアジア各国のケーススタディの記述に費やされており、様々な示唆に富む豊富な内容を有している。しかしながら、各論文が示唆する内容は様々であり、各々の結論は必ずしも本書が前提とする「脱植民地化前の10年程度」が重要、という理解に合致している様には思えない。そう考えれば、本書は「結論の書」というよりは、これから更に試行錯誤を進めていくべき「はじまりの書」なのかもしれない。これからの発展を期待したい。

(木村 幹・神戸大学大学院国際協力研究科)

#### 参考文献

- Albertini, Rudolf von. 1971. *Decolonization: The Administration and Future of the Colonies, 1919-1960*. Garden City, N.Y.: Doubleday & Company, INC.
- 崔章集. 1996. 『韓国民主主義の条件と展望』 ソウル：ナナム出版。(韓国語)
- ギアーツ, C. 1987. 『文化の解釈学』II. 吉田禎吾 他(訳). 岩波現代選書. 東京：岩波書店.
- 木村 幹. 2003. 『韓国における「権威主義的」体制の成立——李承晩政権の崩壊まで』 京都：ミネルヴァ書房.
- Moore, Barrington Jr. 1967. *Social Origins of Dictatorship and Democracy: Lord and Peasant in the Making of the Modern World*. London: Allen Lane. (ムーア, バリントン. 2019. 『独裁と民主政治の社会的起源——近代世界形成過程における領主と農民』(上・下) 宮崎隆次; 森山茂徳; 高橋直樹(訳). 東京：岩波書店.)
- Myrdal, Gunnar. 1971. *Asian Drama: An Inquiry into the Poverty of Nations*. New York: Pantheon Books.
- Skocpol, Theda. 1973. A Critical Review of Barrington

Moore's Social Origins of Dictatorship and Democracy. *Politics and Society* 4(1): 1-34.

池田真也、『商人が絆す市場——インドネシアの流通革命に交わる伝統的な農産物流通』京都大学学術出版会、2022、iii+207p.

### 概要

本書は、インドネシア・ジャワの野菜の伝統的流通が、農産物流通が近代化するなかでどのように変化したのか、その実態を明らかにするものである。伝統的流通とは「場としての市場（いちば [評者注：『パサールと呼ばれる公設市場』（p.17)）と多数の商人による取引で成立」（p.10）する市場システムを、農産物流通の近代化とはスーパーマーケットなどの大規模小売業者の台頭と、政策的に推進されつつある、公設の中央卸売市場を中心とした流通の展開を指す。

評者なりに解釈すると、この変化から次の仮説が導かれる。第1に、品質に応じて選別された大ロットの農産物の迅速かつ安定的な調達という取引要件を満たすために、スーパーマーケットや中間業者が生産者と契約栽培や販売契約などを含めた垂直統合を進め、伝統的な中間流通が中抜きされる。第2に、公設卸売市場が価格形成や集分荷などの機能を持ち、流通が効率化されることで伝統的流通を置き換える。本書は上記の課題と仮説に対して、定性的なインタビューによる事例研究を積み上げる地域研究と、定量データを収集し計量経済学的に仮説検証する開発経済学的手法を駆使して接近するものである。

結論は、伝統的流通は近代的流通に取って代わられることなく、むしろ卸売市場流通として相当程度機能しているというものであり、「伝統的流通はあるがままに市場として発展し……近代的な卸売市場流通に向けて展開し……流通革命という大きな市場構造への衝撃の中でも、それを産地の商人が取り込む形で発展し……商人により自律的に支えられた市場システムである伝統的流通こそがジャワの野菜流通の根幹」（p.177）とまとめられている。評者なりに言い換えれば、伝統的流通が

進化・発展し、近代的流通を逆に包摂しつつあるといえるだろうか。

この結論は以下の各章の知見が根拠となっている。第1～3章は産地流通を対象とする。第1章では、(1) 実態として契約栽培などの垂直統合はむしろ後退し、スーパーマーケットなどを起点とした流通再編は進んでいない、(2) 小売業者・商人、商人間の関係性も希薄化している、(3) 商人・農家間では（農家ではなく）商人が収穫・輸送を行う収穫・輸送請負契約（トゥバサン）がみられることを報告している。第2章では、そのトゥバサンの取引特性が、なぜスポット現金払い取引ではないのかという契約選択の観点から検討される。動機としては、トゥバサンが垂直統合に代わって近代的流通の取引要件を満たせるのかという関心があるのだろう。回答は、トゥバサンの下では契約前に商人が事前に農産物を評価しており、「商品の属性・量などの真の価値を測定するために契約交渉時に必要な『販売前の評価費用』（p.68）が低いために選択されるというものである。結論として、トゥバサンは「契約栽培や出荷組合の前段階として解釈でき、近代化に向けた伝統的流通の適応過程と捉えることができる」（p.87）とまとめられている。第3章は、2000年代に近代的流通を担っていたSS（specialized supplier:「スーパーマーケットへの販売に特化した産地業者」（p.94））がその後どうなったのかをフォローアップし、(1) SSの多くは退出し、生産者との契約栽培も打ち止めになった、(2) 契約栽培が継続しなかった理由は、生産者にとっての代替機会である伝統的流通の市場価格の向上と、スーパーマーケット間の競争激化に伴う契約栽培の買取価格の低下により関係的契約の維持が困難になったため、(3) 現在の流通経路は、（小規模）農家→中間業者（組合・農民グループ・農業企業、大規模農家など）→SS→スーパーマーケットに至ることを明らかにする。そのうえで、産地流通の展開として(1) SSを排したスーパーマーケット・中間業者間の取引は、必要資金や技術の制約から困難だが、(2) 中間業者を排したSS・（小規模）農家間の直接取引は、トゥバサンを介せば可能性はあり得るが、農家への教育的投資が必要との展望が示される。

第4, 5章は卸売市場流通を対象とする。第4章は、「2000年代以降の産地と消費地を結ぶジャワの野菜流通における市場統合を検討」(p. 118)する。時系列データ分析によって消費地・産地間の卸売市場価格の連動から市場統合度を計測し、卸売市場流通には改善の余地があること、流通が非効率な理由として「物流インフラの整備不足や介在する商人の多さによる卸売市場間の価格差」(p. 136)が述べられる。第5章は中央卸売市場で行われている取引の実態解明を通して、卸売市場としての価格形成、集分荷、代金決済・信用供与機能の実現の程度が検討される。ジャワ西部ではスポット契約中心のオープンな市場で、卸売業者(バンドル)と仲買人(チュンテン)も分化し競争的な取引がなされているが、ジャワ東部ではそうではない、卸売市場でのマークアップ率は産地より高く市場統合の阻害要因と考えられる、卸売業者の初期投資は大きく参入障壁は高い、といったことが報告される。最後に中央卸売市場流通の展望として、パサルは中央卸売市場になったのか、中央卸売市場の意義は何かが論じられる。

#### コメント

本書の魅力は、農産物流通の近代化に対して、伝統的流通がどう対峙・変容したかを叙述、考察している点にあり、比較・歴史制度分析として興味深く読んだ。流通や商慣習は地域の独自性が表れやすく、特定のモデルが当てはまりにくい。代表的な「モデル」として、例えば公設の中央卸売市場・商品取引所(commodity exchange)を整備し、流通を近代化させることが考えられるが、アフリカなどではその成否に議論がある。本書では、伝統的流通が近代的流通に取って代わられるのではなく、発展的に包摂しつつあるというメッセージが打ち出され、インドネシア・ジャワの伝統的な地場の制度の自律性、柔軟性、対応力を示すものといえよう。地域固有の制度のあり様と発展過程を明らかにしており、地域研究ならではの成果である。

いまひとつの本書の貢献は、この大テーマに関連した個別論点の地に足のついた詳細な検討だろう。具体的にはスーパーマーケットの購買行動(第

1章)、トウバサンの実態(第2章)、SS衰退後の変化と中間組織の取引形態(第3章)、中央卸売市場内での取引(第5章)など、定量分析を超えた個別事例の詳細な記述から、何が起きていて論点になるかが垣間みえる。評者は特に、近代的流通の取引要件を満たすため、小売やSSと生産者間の垂直統合ではなく、トウバサンを通して品質評価・選別機能を発展させつつ、柔軟に必要な量を調達する経路が形成されつつあるとの観察を興味深く感じた。

以上の貢献を踏まえたいうえで、2点コメントを付したい。第1に、全体としてのメッセージはクリアだが、各章がそれをどうサポートしているのか、有機的に理解することが難しかった。各章の課題(小テーマ)を本書全体の大テーマと十分関連づけ、それを検証すべく構成されていればと思う。特に卸売市場流通を対象とした第4, 5章は次のような疑問が残り、位置づけに迷う。伝統的流通と近代的流通とは何か? パサルが伝統的流通、公設された中央卸売市場が近代的流通なのか? 両者は完全に分化しているのか、それとも(どう)関連しているのか? 卸売市場価格ベースの市場統合分析は、近代的流通と伝統的流通のどちらの効率性を検討しているのか? 卸売市場なので近代的流通と解釈したが、それだと伝統的流通とは関係ないので、卸売市場流通の展開という「近代化」が伝統的流通にどう影響するかという論点とどう接合するのか?

第2に、トウバサンの契約選択(第2章)について、本書のフレームワークが妥当か疑問に感じた。評者の理解では、本章の想定は、品質にばらつきがあり真の評価額が不確実な野菜を適正価格で買い付けるため、商人は収穫前に野菜の品質を事前評価し、その評価費用が低ければ(農家ではなく商人が収穫・輸送を行う)トウバサンが選択されるというものである。しかし、トウバサンと対置される現金払い契約でも、農家が収穫する前に事前評価できるだろうし、収穫後でも検品できる。そうであれば、品質評価では説明がつかないので、商人の方が収穫・輸送作業の効率性が高いという従来の説明が妥当となる。したがって、現金払い契約では品質評価が難しい理由(収穫前に事

前評価のために商人を呼ばねばならず煩雑であり、収穫しながらの方が品質評価が容易、など) や、価格が収穫前と後のどちらで合意されているか(事前評価ができず、かつ収穫前に価格をコミットするなら、商人は品質の不確実性のリスクを負う)、品質や規格に合わせた価格づけがあるか(収穫後に品質ごとの価格×重量で清算すればよい)、など現実に即した事実で本章の想定を裏づけてあるとよかった。また、問題の本質は野菜の品質の不確実性なので、品質とは無関係な一般的な市場価格の時系列分散を評価費用の指標とするのは不適切であり、本書が依拠している Leffler and Rucker [1991] のように、品質のばらつきを表す指標を使うのが望ましい。

以上、2点コメントを加えたが、全体としては捉えるのが難しい発展途上経済の農産物流通の実態を描き出した良書である。農業・開発経済、農産物流通、卸売市場制度、商人活動や関係的契約などに関心がある読者に一読を薦めたい。なお、本書に関わる論点の最近の開発経済学分野の文献として、以下も有益だろう。契約栽培や抜け売りは Blouin and Macchiavello [2019]、農産物の品質プレミアムと品質改善は Bold *et al.* [2022]、商人間の競争度は、Bergquist and Dinerstein [2020]、Casaburi and Reed [2022]、アフリカの中央卸売市場は Sitko and Jayne [2012]、中央卸売市場の効率性と厚生との理論分析については Nyarko and Pellegrina [2022] などがある。

(有本 寛・一橋大学経済研究所)

#### 参考文献

- Bergquist, Lauren Falcao; and Dinerstein, Michael. 2020. Competition and Entry in Agricultural Markets: Experimental Evidence from Kenya. *American Economic Review* 110(12): 3705–3747.
- Blouin, Arthur; and Macchiavello, Rocco. 2019. Strategic Default in the International Coffee Market. *Quarterly Journal of Economics* 134(2): 895–951.
- Bold, Tessa; Ghisolfi, Selene; Nsonzi, Frances; and Svensson, Jakob. 2022. Market Access and Quality Upgrading: Evidence from Four Field Experiments.

*American Economic Review* 112(8): 2518–2552.

- Casaburi, Lorenzo; and Reed, Tristan. 2022. Using Individual-Level Randomized Treatment to Learn about Market Structure. *American Economic Journal: Applied Economics* 14(4): 58–90.
- Leffler, Keith B.; and Rucker, Randal R. 1991. Transactions Costs and the Efficient Organization of Production: A Study of Timber-Harvesting Contracts. *Journal of Political Economy* 99(5): 1060–1087.
- Nyarko, Yaw; and Pellegrina, Heitor S. 2022. From Bilateral Trade to Centralized Markets: A Search Model for Commodity Exchanges in Africa. *Journal of Development Economics* 157(June): 102867.
- Sitko, Nicholas J.; and Jayne, T. S. 2012. Why Are African Commodity Exchanges Languishing? A Case Study of the Zambian Agricultural Commodity Exchange. *Food Policy* 37(3): 275–282.

南田みどり、『ビルマ文学の風景——軍事政権下をゆく』本の泉社、2021、337+vip.

独特な構成の書物だ。第一章こそ、近代の散文小説誕生から、1990年ごろまでのビルマ文学史を丁寧に整理する。だが第二章から第五章までは、そののちにミャンマーを訪れた著者が目にした文学風景を、さながら紀行書のようにつづっている。

ここに通底する視線は「まえがき」と「あとがき」に書かれているとおりに。「わたしはひとりの生活者にすぎない」(p.3)。そして「ビルマという他者を語るわたしは、実は自己を語っているにすぎない」(p.335)。現代の日本ではおそらく唯一であろう、ビルマ文学の専門家である著者が、ビルマ文学とミャンマーを通じて振り返る半生の記録として、興味深く読んだ。

もちろん、本書において著者の日常生活が直接的に語られるわけではない。だが、ひとりの小さな人間の小さな声をすくい上げる営みを文学と呼ぶのであれば、ここに響くのは現地の作家たちや市井の人々の声だけではない。日本人としてビルマ

文学にかかわる自分自身が踏みしめる足下を、真摯な態度で見すえる著者の声も聞こえてくる。その意味でも本書はやはり、文学紀行書と呼ぶのがふさわしいだろう。

第一章「軍事政権下への文学的道程」では、日本占領期から国軍支配の時代までの文学的潮流の変遷が、時系列に沿って語られていく。支配の主体が変われば社会の規範も変わる。それは文学作品にも大きな影響を与える。

著者は、1989年に軍事政権が採用した「ミャンマー」という国名およびそこに想定される「ミャンマー文学」という語の孕まされた理念と、その実態の撞着を指摘したうえで、ビルマ語によって書かれた文学を「ビルマ文学」と呼んで論を進めていく。

1930年代に、現実を平明に写実する「キッサン」と呼ばれる文学が現れ、古典と翻案ものからの大きな質的転換が起こる。あわせて反英反植民地主義ナショナリズムにもとづく作品も登場するが、1942年からの日本占領によって主題がさらに変化する。「暗黒時代」とも呼ばれるこの時期には、ビルマ人としての意識向上を訴える啓蒙的小説が増える一方、日本軍のプロパガンダ的物語は忌避された。

占領が終わると、内戦が始まる。テインペーミンのように、被抑圧者階級解放のための武器として文学を捉える主張と、芸術性を重視する主張が対立する。「戦後文学」は、娯楽小説、リアリズム（人生描写小説）、女性作家の作品、抗日闘争文学、さらに内戦文学へと、多様な発展を遂げた。

1962年にビルマ社会主義計画党の一方独裁時代となると、政権は「国民文学賞」の創設など、文学へのこ入れも図る。ビルマ軍の主導による抗日が強調される小説や、抗日戦線におけるビルマ族と少数民族の友好が描かれる作品が登場し、これらの「神話」によって史実が再編されていく。

1970年代。国土は分断されたまま、文学への統制はさらに強化され、政治的主張を排した人生描写小説が増える。抗日小説は舞台を戦後に移し、国家を分裂から守る国軍の活躍を描く愛国小説へ変態する。文学の階級性を説く左翼的潮流は衰退していった。

1988年の民主化デモと鎮圧を経て、新たな軍事政権の支配体制が確立する。言論統制と長引く貧困の影響を受けて、日常の細部を語るしかできない長編作品が力を失い、短編小説の時代となる。同時に、長らく少数派であった女性作家たちの活躍が目立つようになる。90年代に入ると、人生描写小説のリアリズム的傾向と対立する形で「モダン」と呼ばれる潮流が登場してくる。

こうしてビルマ文学の歴史を1世紀近くにくわたって振り返ったのちに「モザイク鏡」と題された短い節が差し挟まれる。「他者は自己を映す鏡だ。かわりを持つ他者が増せば、それだけ多様な自己が鏡のモザイクを形成していく」（p.90）と述べる著者が、1990年代以降に、ビルマ文学（とそれを担う人々）というたくさんの「モザイク鏡の小片の堆積の中に分け入っていった旅の記録」（p.91）へと、語りが変化していく。

なお、このいわば「紀行編」においては、それまでの「歴史編」で挙げられた事実関係の細部が補われていく。特に女性作家たちについての記述が、第一章ではやや唐突で浮いて感じられるが、第二章以降に与えられる豊かなディテールによって補完されていくようで、興味深い。

第二章から第四章までは「軍事政権下をゆく」と名付けられた章題に、それぞれ異なる副題が与えられる。第二章「渦動」は、1993年から1999年までの旅の記録だ。

この章で、著者は何度もアウンサンスーチー邸に赴く。1995年には14分間の面会を果たす。彼女の伝記を書くことになったのをきっかけに、多くの女性活動家や作家に聞き取りをする。共産主義を信奉して地下活動に赴き、投獄されたキンミョウユニョン、日本時代以上に厳しい言論統制の下で雑誌を作るキャリア。無邪気ともいえるナショナリズムで軍事政権派と目される作家マ・サンダー。

異なる主義主張の彼女たちもみな、発展と貧困の格差が激しく広がる社会に暮らす。困難にあえぐ民衆は、怒りを政府への闘争に振り向けることもできず、ただ耐え忍ぶ。著者は政府が授与する文学賞授賞式に参列してその空虚さを目にする。大物作家たちが海外に亡命する。絶望的な状況にも感じられるが、詩を書く若者が増えているとの

言葉も耳にして、そこにわずかな希望を抱く。

第三章は2000年から2003年を描く「稽留」。渦巻いていた変化の兆しが、そこからどこへも行けずに滞ってしまう。

著者は、作家テインペーミンの作品舞台や、彼の抗日闘争の足跡をさまざまにたどっていく。インレー湖やチャウンターなど、閑散とした観光地を回る途中では、強制労働に従事させられているとおぼしき人々を目にする。上辺の開発とインフラ整備の裏では、変わらず経済的困難に不満を覚えるひとたちがいる。大学は辺鄙な場所に移設され、教育内容は不十分だ。検閲はさらにエスカレートして、一般的な用語すら差し替えられてしまう。著者がたどる作家の長い苦闘の旅路と、現代の息苦しさが重なって、評者は胸が締め付けられるようにすら感じた。

のちに著者は、ヤンゴン大学ビルマ文学科に、在外研究員として派遣される。日本占領期の文学にかんする資料を収集しようとするが、閲覧も複製も満足にできない図書館、軍事政権とつながるせいで優秀な知識人が距離を置いてしまう大学、あらゆるプロセスが遅々として進まない役所の仕事に苦勞する。

第四章は2004年から2007年の「臨界域」だ。人々の不満を蓄えてきた社会の相が転移しようとする瞬間を記す。

印象的なのは、第二章以降、著者がたびたび会いに行く女性作家ルードゥー・ドー・アマーの存在感だ。「人民（ルードゥー）」を冠した出版社の主幹たるマンダレーの「肝っ玉おっ母」（p.102）は、いまだに舌鋒鋭く、人々を勇気づける。

著者は、2006年からの新首都ネーピードーも訪れる。地図を買おうとすれば止められるほどに「秘密の匂い」（p.258）の濃い、新しい街。「生活の匂いは希薄だ」（p.257）というひとことに、これまで著者が現地の人々と交わる中で見てきた生き方と、政権が作り出す幻想との乖離が見て取れる。愛国心の昂揚に貢献する小説と、そういった価値意識を拒否して、検閲をかわしながら執筆される作品との「二極分解」（p.252）が進む文学状況にも、通ずるものがある。

2007年8月に、88年の指導者たちが続けて亡く

なる。入れ替わるように、9月には若い僧侶と民衆たちを中心とした大きなデモ行進が起こった。激しい弾圧があり、日本人記者も命を落とす。そしてさまざまな規制が強まっていく。だが、この時代の相転移に、著者はかすかながらも希望を見出していく。

そして最終第五章「『民政移管』のあとさき」では、2008年から2020年までの「ビルマの日々」を一気に振り返る。国内状況も、著者を取り巻く環境も、まさに怒涛だ。2008年のサイクロン・ナルギスの被災地をまたたく間に駆け抜けて、支援が行き届かないさまを目にする。検閲はさらに強化され、サイクロンにかんする報道も、反抗する詩人たちの言葉も制限される。厳しくなる統制の中、著者自身のビザ申請も却下される。

だがそんな受難を「この国のもの書く人びとと、ようやく同じ地平に立てた」（p.285）とあっさり言ってしまう著者は、シンガポール、チェンマイ、クアラルンプール、ベナンといった周辺国のミャンマー・コミュニティを回る。そうこうするうちに2011年の「民政移管」が訪れ、ビルマ文学をめぐる旅も再開される。2012年には検閲が廃止され、出版界の動きも活発になる。講演会や朗読会の開始、SNSでの作品発表、アウンサンスーチーや共産党についてのノンフィクションの出版、発禁小説の再版など、ここまで描かれてきた閉塞状況とはうってかわるようだ。低迷していた長編小説も動き出し、その内容も、深刻な現実を描くリアリズム、SF的作品、大胆な性描写のある作品、歴史小説など、多様だ。

だがすべてが楽観的なわけではない。「アウンサンスーチー政権」成立後も国軍は強い力を握り、言論状況も不安定だ。政権党も不用意に文学側と距離を縮めていき、著者の不安がのぞく。そして、ロヒンギャ問題についての政権やメディアの沈黙と国内混乱の状況を整理したのちに、著者は本書でたびたび触れてきた問題意識に立ち返る。かつてのビルマの地に踏み入って蛮行をおこなった国家の、軍事政権に承認を与えてODAを供与してきた国家の人間として、ミャンマーとどのようなかわりを持っていくべきか。種々の問題を含む『ビルマの堅琴』を引き合いに出して、日本側に欠落

した「ビルマ人へのまなざし」(p. 331)を指摘し、本書は閉じられる。

本書はこのように、ビルマ文学の長い旅路と、著者自身の長い旅路を追う書物だ。だがその構成ゆえに、一読者としてわずかに記述の不足を感じる部分もあった。

第一に、事実関係が整理され、並べられていく本書においては、個々の作品や作家についての記述がどうしても不十分になる。著者が研究を続けてきたテインペーミンはたびたび言及され、その人生やいくつかの作品についてもやや踏み込んだ記述があるが、限定的なものに留まっている。

そして第一の点とも大きくかかわるが、社会的・歴史的背景と文学の関係にフォーカスされていくため、ビルマ文学の物語論的特徴や、種々の文学理論によるアプローチの可能性などが捨象されている。

たとえばひとつ細かいことを書くと、90年代以降に登場する「モダン」派と呼ばれる文学的流行が、具体的にどのような物語・文体的特色のものなのか、しっかりと把握できないままに話が進んでしまう。87-88頁での言及は、自由韻詩としてのモダンのみに留まり、散文におけるモダンがなんなのかはきちんと説明されない。

そうこうするうちに作家ターヤー・ミンウエーを紹介する253頁には「ポストモダン擁護の論陣を張る」という記述がなされており、ビルマ文学におけるモダン/ポストモダンとは一体どんな特徴をもつのか、そういった文学作品に対してポストコロニアルな、あるいはポスト冷戦的な批評のアプローチは可能なかどうか、読者にはほとんど手がかりが与えられない。

ただこれは「東南アジア」の文学を読もうとする人間が必ず突き当たる問題でもある。微に入り細を穿つような専門的研究のためには、まず総合的な知が、すなわちその風景を読み解いていくための見取り図が必要だ。だが東南アジアの多くの地域の文学において、きちんとした見取り図はほぼ存在しない。数少ない研究者が現地に分け入って、まず経験から描いていくしか手段はないのだ。

その意味で本書は、ビルマ文学の風景を丁寧に描く貴重な見取り図であり、その描き手自身の姿

を映してくれる鏡でもある。こういった書物が書かれることで、東南アジアの文学を志す次の世代が、安心して一步を踏み出すことができる。そこはまだ未開の領野のような場所かもしれないが、そこで多くの作家たちの声を聞きながら「生活」をしてきたひとがいるという事実が、勇気を与えてくれる。

(福富 渉・タイ語翻訳・通訳)

廣田 緑、『協働と共生のネットワーク——インドネシア現代美術の民族誌』grambooks, 2022, 8+495p.

本書は、インドネシアにおける現代美術家と美術界のプレイヤーたちについての民族誌である。著者は、1993年から2010年までインドネシアの美術家として活動し、帰国後もインドネシアに赴いての調査を含め、様々な形で聞き取りや参与観察をおこなった。執筆にあたって著者は、『インドネシア美術史 *Sejarah Seni Rupa Indonesia*』[PPPKD 1979]を「インドネシア人によるインドネシアの“精神の美術史”として貴重な文献」(p. 35)と位置付け、それを著した「インドネシア人研究者と思いを同じくして、インドネシアの精神性を合わせて記すよう意識した」(p. 35)としている。自らの経験と調査および数多くのインドネシア語の文献を活かし、当事者のまなざしに重きを置いて、インドネシア近現代美術を政治経済に深く関わる社会的動態のなかにとらえている。

民族誌を書くことに加え、本書は、著者が現地で「収集した資料」と「美術関係者からの聞き取り」を提示し、インドネシアの事例をもとに「現代美術とは何か、現代美術の社会的役割は何かを問う」ことを目的としている (pp. 28-29)。

第一部「インドネシア美術史の穴埋め」(第一章から第四章)、第二部「スニ・コンテンポレル——インドネシアの現代美術」(第五章・第六章)、第三部「プレイヤーの民族誌」(第七章から第十二章)から構成される。第一部・第二部は、インドネシア現代美術の歴史的文脈に光をあてている。

第一部では、第一章で上述の目的・指針を、第

二章でインドネシアの概説を提示したあと、第三章、第四章で、インドネシアで近代美術が誕生したオランダ植民地時代から、日本軍政期、独立闘争期、スカルノ政権期までの近代美術の展開について、ナショナリズム醸成、オリエンタリズム批判、植民地統治者の美術や力の流用、美術による国際化といった切り口から、以下のような諸事象を彫りだしている。

第三章は、インドネシア近代美術創成期から独立に至るまでを対象としている。20世紀初頭、蘭領東インド在住オランダ人画家たちが平穏で美しいインドネシアの風景画を多く描いた。その絵画様式は、インドネシア人画家にも受け継がれるが、「麗しの東インド」と通称され、民族主義的美術家たちによる批判の対象となった。同時期、バリ島においては、現地在住の欧人画家たちが主導した、バリ人画家たちのグループ「ピタマハ」による「バリ絵画」が独自の展開を見せた。

1938年にジャカルタで結成されたプルサギ（インドネシア画家連合）は、美術におけるナショナリズムを唱えたが、日本軍侵攻により解散した。日本の軍政下で1943年に設立されたプートラ（民族総力結集運動<sup>1)</sup>）の活動を通じて、その総裁であったスカルノをはじめとする民族運動の指導者たちと芸術部門で活動した画家たちは親交を深めた。日本軍政の宣撫工作を担った「啓民文化指導所」において、インドネシアの芸術家たちも活動したが、インドネシア独立の意志を失うことはなかった。

1945年から1949年の独立闘争期には、画家たちは、ジャワ島でいくつもの画家集団を形成再編しつつ、闘争の指導者スカルノたちと協働した。そ

れらの画家集団の創設者たちは、1922年にジョグジャカルタで創設された民族教育学校タマン・シスワに学んだ経験を持ち、その理念と運営方針に強い影響を受けていた。著者は、「住宅の敷地内に設置された礼拝所」「芸術活動のための場」という辞書によるサンガールの意味（p.84）を示したうえで、ジョグジャカルタにくらした自らの経験、インドネシア語文献と日本語文献を参照しながら、当時の画家集団を、タマン・シスワと共通する理念と組織形態をもつサンガールであると位置付けている。それらサンガールが実践した「大家族が共同で暮らしながら学ぶという緩いつながり」（p.87）は、最近のインドネシアのアーティスト・コレクティブ（第十一章で詳述）にも通底するとしている。

第四章はスカルノ政権期を対象にしている。ナサコムNASAKOM（ナショナリズム・宗教・コミュニティの協働）を指針とするスカルノ政権下では、レクラ（民衆文化研究所）がインドネシア共産党の文化部として活発に活動し、関係する多くの美術家が、それまでのようにオランダの文化財団を経由するのではなく、社会主義諸国とのつながりから国際化を果たした。スカルノはインドネシア建国を国内外に発信するために美術の力を利用し、多くの美術家と親交を結び、国内最大のコレクターとなった。

独立後、美術教育のための学校制度整備が開始され、現在インドネシアの美術教育の二大拠点である、西洋近代教育の影響の強いバンドゥン工科大学美術学部とナショナリズムと社会主義傾向の強い国立芸術院ジョグジャカルタ校（以下ISIジョグジャ）の設立へと展開してゆく。

第一部の終盤で著者は、1950年以降の美術家の経歴や制作について、主として『インドネシア美術史』[*ibid.*]の記述を引用し、*Modern Indonesian Art* [Karnadi 2006]の図版などを転載して紹介している。また、インドネシア近代絵画の第一人者とも呼ばれるスジョヨノによる1939年の論評を嚆矢として、美術家たちが美術批評を行うようになり、その後のインドネシア美術批評が発展したと指摘している。

第二部は、1965年に起きたG30Sクーデターを

1) プートラ POETERA（現在の綴りでは PUTERA）は、Poesat (Pusat) Tenaga Rakjat (Rakyat) の略語である。著者は「民族総力結集運動」という訳語をあてている。Rakjat (Rakyat) に「民族」という訳語をあてるのは異例である。中村光男は「人民総力結集運動」[レグ 1984: 225]、倉沢愛子・北野正徳は「民衆総力結集運動」[インドネシア国立文書館 1996: 176]と訳し、それぞれ「人民」と「民衆」という訳語を Rakjat (Rakyat) にあてている。プートラの解説に際しては、著者も「民衆」という語を使っている。

契機とする共産党嫌疑者の大虐殺と排除、スカルノ大統領の失脚とスハルト政権への移行という政変、抑圧的で安定したスハルト政権下におけるインドネシア現代美術の誕生、2000年代の市場化による狂騒までの歴史について、インドネシア独自の美術と政治や社会を模索する美術家たちに焦点をあてて以下のように追っている。

第五章は、スハルト政権期とその終焉直後までを対象としている。G30S以後の共産党員虐殺の波のなかで、レクラに関係した多くの美術家たちが殺害、投獄、流刑され、あるいは海外への逃亡を余儀なくされた。これがトラウマを生み、美術家の間で脱政治化がすすんだ。そのような状況のなか、ジョグジャカルタの前衛的な若手美術家たちが、1974年ジャカルタ芸術協議会主催の大規模展における審査員たちの保守的な総評に異議を唱え、保守的世代を葬り去ってインドネシア絵画を革新することが必要であるという「黒い十二月」の声明を同協議会に提出した。その後彼らは、1979年まで「新美術運動」と銘打った展覧会を開催した。

著者は「新美術運動」とインドネシアの現代美術について、インドネシアと日本の美術評論家の指摘を引用して以下のように付言している (p.149)。「新美術運動」は、インスタレーション等いくつかの特徴をもつことにより、現代美術の誕生を標す。しかし、アジアの他の地域同様インドネシアでは、「近代美術」「現代美術」に関し誰にでも共有される明確な定義が欠如しており、両者の区別は不明である。また、美術／非美術の区別においても近代西洋の基準が適用されにくいいため、現在制作されている作品の多様性は、セクト化された日本美術界の常識では計りしれない。

1980年代後半から1990年代初頭に起こったグローバル市場化に連動し、投資目的で絵画を購入するプレイヤーたちがインドネシア美術界にも影響を与えるようになり、「麗しの東インド」様式絵画など装飾的な絵がよく売れるようになった。一方、実験的で新たな表現方法を模索し政治社会的なメッセージ性や、コンセプト性をもつ現代美術的作品は売れないばかりか発表の機会さえなかった。そのような状況に対し、ISIジョグジャ出身の美術家ニディッティオ・アディプルノモとメラ夫

妻は、現代美術作品を発表する場として、ギャラリー・チムティを1988年にジョグジャカルタに設立した。チムティを拠点に活動した美術家たちは、パサール (pasar 市場) に対抗して、自らの作品をワチャナ (wacana メッセージ性) をもつとして商業主義的な作品から差別化した。設立者の一人メラがオランダ人であることもあり、チムティは、インドネシアの現代美術家を国際舞台につなげるエージェントという役割を果たすようになる。同時期には、「新美術運動」の美術家であったジム・スパンカッに代表されるようなキュレーターや美術批評家が、商業主義的ではない美術の価値づくりに貢献するようになった。

第六章は、1980年代末に始まるインドネシア美術の市場化の推移に焦点をあて、それを、美術評論家アグス・ドゥルマワンに依拠して四期に分け、以下のように考察している。

ブーム第一期 (1987年) は、円高を背景に日本企業が行った国際的アート売買に影響されて起こった。インドネシア人コレクターが「麗しの東インド」様式絵画を購入し、ジャカルタやバンドゥンで次々に画廊が開設され、バリでは観光客向けのアートビジネスが急成長し、バリ様式絵画などのバリ人コレクターたちが、私設美術館を設立した。

ブーム第二期 (1992-93年) は、冷戦終了後のグローバル資本主義市場の拡大のなかで起こった。文化的多様性が称揚されるなか、第三世界の近現代美術に欧米の目が向けられ、国内市場では既に評価の決まった近代絵画やバリ様式絵画の取引が増え、国際市場では現状批判的なメッセージをもったインドネシアの現代美術作品が目目されるようになった。

ブーム第三期 (1997-98年) には、インドネシアのコレクターの嗜好が多様化すると同時に、ワチャナ派 (メッセージ性をもつ) 作家とパサール派 (市場志向の) 作家の違いが顕著になり、同時に多くの美術関係者は商業的価値に高い関心を寄せるようになった。2000年以降には、第三世界にも富裕層が出現すると同時に、アートインフラ拡充、現代美術の大衆化、美術市場のグローバル化がインドネシアにも大きな影響を与えるようになる。

インドネシアでブーミン *booming* と呼ばれるブーム第四期 (2007年) は、1980年代末から始まった中国前衛美術ブームの影響と美術界のグローバル化を背景に、東南アジア現代美術を恰好の投資対象とするコレクターが出現したことを一つの要因としている。同時に、インドネシアの民主化と政情安定のなか、スハルト政権下では抑圧されていた華人企業家、特に海外で教育を受けた若い世代の華人企業家たちが活発に美術市場に参入するようになったことも関係している。さらに、国際的評価の高いオークション会社がインドネシア市場に裏付けを与えるようになり、美術作品は安心できる投資対象となった。しかし、インドネシアでは、公的制度などの美術インフラが整っていないことから、にわかコレクターとにわか美術家出現の狂騒が引き起こされた。1999年から2010年まで美術家としてジョグジャカルタで暮らした著者は、身をもって経験したブーミン開始からピークに至る時期の狂騒を生き生きと描いている。

現代美術の活動の場が、ジャカルタ、バンドゥン、ジョグジャカルタ、バリにほぼ限定されてきたことを確認したうえで、インドネシアの美術市場を支えてきた多くの商業画廊について、著者自身の現地調査に基づき、設立の経緯と特徴を写真とともに報告し全体的動向を伝えている。さらに、国際観光と現地在住の外国人によって主導されてきたバリの美術傾向と市場動向について、実地調査のデータを交え報告し、バリは「バリ人主導、バリ人による現代美術の活動場」という意味では、まだまだ僻地」(p.199) であると指摘している。

「プレイヤーの民族誌」と題された第三部 (第七章から第十二章) は、本書の真骨頂である。

第七章は、ジョグジャカルタを拠点に、現在国内外で評価の高い現代美術作家であり、著者の友人である、ハンディウィルマン・サブトラ (以下ハンディ) に焦点をあてて、この20年余の美術の市場化の影響を描き出している。ハンディは、ゴミのような様々な素材、所謂ファウンド・オブジェを多様な技術を用いてつなぎ、常識的な見方を覆すような繊細な作品を作る。ただ黙々と作品を作っていたハンディは、2000年頃までは、好きなたばこ一本買うのにも悩むような経済状態で

あったが、2004年頃からブーミンに翻弄される。しかし、先輩美術家の保護や協働もあり、それに呑み込まれることなく、2013年には、土地を購入してアートスペースをもつことができた。ブーミン後のジョグジャカルタには、経済活動とそれとは異なる美術実践の間でバランスを取りながら、インドネシア美術界をダイナミックに導いている美術家も少なくないと述べる。

第八章は、ものづくりに関わるインドネシア語に注目し、広い意味での美術関係者の意識について考察し、市場絵画と美術的ものづくりの連続と不連続や緩やかな住み分けを、バリとジョグジャカルタの調査に基づき、多様なつくり手や売り手などの活動からダイナミックに描き出している。

第九章は、2004年に創刊されたインドネシア初の全国版美術雑誌『ヴィジュアル・アーツ *Visual Arts*』22号 (2007) の記事と著者の現地調査に基づき、独立後から現代に至るまでのインドネシアの主要なコレクター3名 (スカルノ、チプトラ、ババツ OHD (以下ホン・ジン)) と、現代における比較的若いコレクターの動向、および彼ら/彼女らが影響を与える美術界の動態を明らかにしている。

スカルノ初代大統領 (1901-70) は「世界で最も多くの美術品を収集したコレクター」(p.268) といわれている。そのコレクション集が1964年に日本で出版されており、そこに掲載されているスカルノの直筆序文には、彼にとって近代絵画作品は、独立の証として重要であることが記されている。

不動産業で大成功を収め、ビジネスとアートをつなぐことを自らの役割としていたチプトラ (1931-2019) は、2010年に自らが所有するジャカルタのマーケティング・センターをマーケティング・ギャラリーと改称して、その商談スペースを現代美術の展示会場とした。2013年には新たに商業娯楽施設を建設し、その最上階にいずれも1,500 m<sup>2</sup>の3つのギャラリーと、独立期からスカルノ時代の国民的近代画家ヘンドラ・グナワンを中心に巨匠たちの作品を収集した美術館と劇場を開館した。

古くからの主要コレクターの収集は一般的に近代絵画に偏っているが、華人ホン・ジン (1939-) は、

若い時から美術作品に惚れ込み、インドネシアの近現代作品をむらなく収集してきた。2,000点を超すコレクションを公開するために、1997年から3つの美術館を開設した。彼の鑑識眼にはオークション会社からも信頼が寄せられ、彼はジョグジャカルタで開催された展覧会の開会を宣言するという重役も果たしてきた。コレクションの保存や修復に配慮と資力を注ぎ、経済的困難にある若い美術家にとってのパトロンのような役割も果たしている。

2007年頃を頂点とするブーミンの時に新しく参入したプレイヤーのうち最も目立ったのは、アートラバーあるいはピュア・コレクターと称す若手富裕層である。新参コレクターたちのほとんどは、海外で教育を受けた経験をもつ華人である。著者が、聞き取りのために招き入れられた食事会に参加した若い富裕なコレクターたちの会話は英語であった。彼ら／彼女らは現代美術について英語で学んでおり、「現代美術について話すのに適している」ということも英語で会話することの理由と考えている。彼ら／彼女らは概して、現代美術関係のイベントに熱心に参加し、現代美術について学ぶために海外にも頻繁に出かけている。なかには、キュレーターとして展覧会を開催し、ビエンナーレの委員を務め、現代美術のための財団をつくり、情報を積極的に発信するためのHPを開設している人もいる。それに対して、文化的ステータスの確立に現代美術を利用しているという批判もあるが、著者は、新参コレクターたちに対する評価は、ある程度の時が経ってから初めてなされるべきであるとしている。

第十章は、つくり手、買い手、鑑賞者を結ぶ、インドネシアのアートインフラの在り方を詳細に確認したあと、2004年にヘリ・ペマツによってジョグジャカルタに創設されたアート・マネジメント組織（以下HPAM）とその具体的な活動を明らかにしている。現代美術に対する公的支援が少ないなか、ヘリ・ペマツがHPAMをつくり、彼の気遣いゆえに可能となった顔の見えるネットワークでアートインフラを形成し、地域の人々も巻き込みながら、アートイベントを成し遂げている様子を、文献と現地調査および著者自身の美術家としての経験から活写している。

美術メディアにおいて、国際的な美術界での経験のあるインドネシアの美術関係者たちは、インドネシアで最近見られるようになったアート・マネジメント組織は美術をビジネスに利用しており、国際的には通用しないものであると指摘している。HPAMは、確かに国際的なそれとは異なっているかもしれないが、ジョグジャカルタの地域性、顔の見えるコミュニケーションの尊重、コレクターのパトロンの支援が相まって可能になった、インドネシア独自のものであるといえど著者は指摘している。

第十一章は、最近の美術の革新的な動向を示唆する集団化の名称として、オルタナティブ・スペースとコレクティブが世界的にも、東南アジアでも見られることを概観したうえで、政府の支援が少ないインドネシアで、現代美術を活かしながら、草の根的な社会実践をしてきた3つのアーティスト・コレクティブ、「タリン・パディ」、「ルアン・メス56」、「ルアンルパ」、同じように柔軟な活動実践とネットワーク形成がみられる、学際集団「クンチ」、市民団体「ライフ・パッチ」について報告している。特に、変幻自在といっているほど、活動とネットワーク形成を柔軟に成し遂げている「ルアンルパ」については、「メトロポリスに増殖する協働体」(p.371)と銘打って、年代と発展形態に分けて詳述している。

「ルアンルパ」は、アムステルダム王立美術アカデミー留学から1999年に帰国したアデ・ダルマワンが若い美術家仲間とともに、実験的な新たな美術実践をするために、2000年に開始した。初期(2000-07年)には既に海外からの財政支援を受け、多種多様な活動を展開した。ジャンル横断的な美術イベントが海外の文化機関に評価され、活動の継続と規模拡大を可能にした。「ルアンルパ」が行う最先端のイベントは、若い美術家、音楽家、ライターなどを引き寄せ、巻き込んで、ネットワークが増殖していった。

2008年、大型化した活動を円滑に実施するために、活動内容に従った部門を設けた。経理部門も必要になってきたため、2012年に、ジャカルタで活動する他の2グループとともに、各グループの経済力とイベント利益などに応じて出し入れする「共同サ

イフ」(p. 379)の資金システムをもつようになった。

2015年には、「共同サイフ」を構成するグループとともに、敷地面積6,000 m<sup>2</sup>の「サリナ倉庫エコシステム」の運営を開始し、「資源も資金も知識もシェアし、協働する学際的な空間」(p. 379)形成を目指した。一般市民も参加する様々なイベントを行い、社会と美術をつなげるプロジェクトを積極的に展開した。

2016年に「ルアンルパ」は、あいちトリエンナーレで、美術と教育を結ぶプロジェクト《ルル学校》を実施した。スローガンは「アートより友達」(p. 383)である。その間5カ月間、著者は仲介役として働き、参与観察した。ルル学校のコンセプトは、「文化仲介人 culture agent の育成」と水平的な「知識のシェア」だ (p. 383)。あいちトリエンナーレにおいてもみられたように、SNSを最大限に活用した情報共有、および彼ら／彼女らの柔軟性とコミュニケーション能力は、「ルアンルパ」の国際的な活躍を支えている。

2018年末、「ルアンルパ」は、ジャカルタ南部に広さ700 m<sup>2</sup>の土地を購入して、他の2グループとともに、美術を通じた教育プログラムを広く提供する「グッスクル GUDSKUL」を設立した。

「ルアンルパ」は、様々な出会いを捉えて実践を展開し、有機的に成長を繰り返し、その活動様態は、「ルアンルパ」のワークショップに参加した若者を通じて、出身地方都市に合った形でコレクティブが形成されることによって増殖している。こうした各都市の新しいコレクティブは、「幅広い美術表現に関わるだけでなく、地元の住民と生活環境や歴史や政治問題を結んだ新たな知識のシェアに乗り出している」(p. 402)と著者は指摘している。

最終章は、近年コレクティブといわれるようになった、インドネシアの諸集団の特徴を自らの経験と聞き取り、インドネシアの歴史家で「クンチ」のメンバーでもあるアンタリクサの考察等を参照してまとめている。すなわち、水平な horizontal 関係、相互扶助 gotong royong の慣習、あてもない「ダベリ」nongkrong の習慣、「借りパク」nebang の許される仲間意識、「寝食をともにし、師から知識を受け継ぐ」nyantrik ことによる、インドネシア固有の精神の協働体であると考察している (pp. 425-

444, [Antariksa 2016 等])。

また、2022年ドイツ・カッセルで開催される<sup>2)</sup>国際現代芸術祭ドクメンタ15で、「ルアンルパ」が芸術監督を務めることになったが、それにより、彼ら／彼女らがジャカルタで実践してきた有機的ネットワークを、カッセルを拠点に増殖させることに、著者は期待を寄せる。さらに、多世代や「多領域の人々が集い、相互に助け合い、シェアし、地域に根ざして成長する水平的な力、アート・コレクティブの実践は、今の世の中において、美術界に限らず人間に必要な生き残り戦略だと言えるのではないだろうか」(p. 452)と締めくくっている。

歴史的通観を行い、インドネシアで長年活動した美術家の視点と豊かな経験と広範な聞き取りから、インドネシア美術家と関係者の協働を生き生きと描いた本書は、類を見ない貢献をしている。多くの註、年表、一覧表の作成、インドネシア語で書かれた多数の著書や論文を参照していることの意義は大きい。美術界のプレイヤーたちの民族誌に思わず引き込まれ、目から鱗が落ちるような経験を何回もさせられた。そう評価したうえで、以下の批判を提示したい。

第一に、表記などに関し最終チェックが必要だった。コピーエディターの助力が出版社から得られなかったということでもあろう。例えば、第三章の図、Fg.3-14, Fg.3-15, Fg.3-17が欠落している。第五章本文中で、表5-1 (p. 157)に議論に必要な事実を示すための「下線を引いた」(p. 158)と述べているが、引かれていない。本書内で食い違っている情報を吟味せずに提示している (pp. 65, 88, 474)。インドネシア語文の誤訳 (p. 357) やバリ語タクス taksu の誤表記 (p. 403 など) が見られる。記述にとって重要な語 pernyataan (声明) を pertanyaan と取り違えて「質問書」と繰り返し翻訳している (pp. 140, 142, 143, 150, 161, 174, 303)。<sup>3)</sup>

2) ドクメンタ15は、2022年6月18日から9月25日まで、100日間に渡って開催された。本書出版時2022年4月11日には、まだ開催されていなかった。

3) 著者が提示している2つのサイトで確認した。<https://gerakgeraksenirupa.wordpress.com/2013/05/19/desember-hitam-gsrp-dan-kontemporer/>

書誌情報の提示に様々な不備がある。

第二に、資料の選択と取り扱いに関して改善されるべき点が少なくない。

一点目は、一次資料の位置付けに関し著者には混乱があるように思われる点である。例えば、コーネル大学出版から英国で出版された *Art in Indonesia* [Holt 1967] を「インドネシアで出版された一次資料」(pp. 30-31)としてあげている。また著者は、『インドネシア美術史』[PPPKD 1979]を、インドネシア国家形成期の早い時期に、インドネシア研究者たちによって、インドネシア人のために書かれたインドネシア語の学術的美術史、「インドネシアの“精神の美術史”」(p. 35)として高く評価し、「一次資料」として参照する。この時期の国家形成の一環を示すテキストとして考察する場合 (p. 65) は一次資料と位置付けられうるが、この著書は、多くの先行研究を参照すると同時にオリジナルな調査資料の明示のないことから、美術史の実証的な一次資料とは位置付け難いことに留意が必要ではないだろうか。

資料の位置付けと選択についての批判の二点目は、『インドネシア美術史』[*ibid.*]の本書における中心化に関する。『インドネシア美術史』[*ibid.*]以前に、これと同様に、インドネシアの中央政府機関によって発行された近代美術史を含む著書2冊、『インドネシア美術 *Kesenian Indonesia/Indonesian Art*』(1955)と『インドネシア美術とその普及 *Seni Rupa Indonesia dan Pembinaannya*』(1978)についても著者は簡単に言及し、これらではなく『インドネシア美術史』[*ibid.*]を選ぶ理由をいくつか述べているが、いずれの理由も的を射ているとはいえない。

また、「インドネシアの精神性」は、時代、人、立場により、主張が異なる。例えば、1930年代において展開された、インドネシア民族主義者たちによる「文化論争」を見れば、「インドネシアの精神性」なるものが、同時代においても人により、立場により大きく異なることが分かる。また、ス

カルノ政権下で文化芸術活動の多くを担っていたレクラの「インドネシアの精神性」に関する考え方が、スハルト政権にはまったく受け入れられないことは容易に想像できる。1974年に、保守的な美術家たちに「新美術運動」の人たちが突き付けた「黒い十二月」の声明や「新美術運動五つの基準」にこめられた「インドネシアの精神性」は、保守的な美術家のものとは異なる。「新美術運動」のきっかけとなった「インドネシア絵画大展覧会」の保守的審査員6名のなかには、『インドネシア美術史』[*ibid.*]の美術部門担当者ポポ・イスカンダールが含まれていた (pp. 141, 167)。

抑圧的なスハルト政権下において教育文化省の統括のもと著された『インドネシア美術史』[*ibid.*]が謳っている「インドネシアの精神性」がひどく限定されたものであるのは、次のような諸点が示している。スハルト政権は文化の「非政治化」を推し進めたが、この編著は「美術は『非政治的』であるべき」という暗黙の政治的視座を通して書かれている。スカルノ政権が本格的に始動し始める1950年以降の記述が希薄である。本書で、美術の推奨者、愛好者、コレクター、外交戦略上の利用者であるとして紙幅を費やされているスカルノについての言及は、この編著では、日本占領下において文化領域の指導の重要性に気づいた4人の民族主義者のリーダーの一人である、というくだりのなかで、一度なされているのみである [ibid.: 169]。レクラについては、しばしば対立しがちなリアリズムと抽象に関し、1950年に創設された「国立芸術アカデミーは、レクラという団体(1950-1965)による芸術を政治化する企ての影響を受けることなく、厳守すべき美的感覚の問題として、これら二つの芸術様式を受け入れることができた」[ibid.: 197]という文章のなかでのみ言及されている。「新美術運動」やそのメンバーに関する言及はない。

『インドネシア美術史』[PPPKD 1979]を選択し取り扱う場合は、無批判に中心化するのではなく、以上のような諸点を考慮に入れた視座が必要とされたのではないだろうか。

資料の選択と取り扱いに関する批判の三点目はインドネシア語以外の文献に関するものである。

、及び <https://historia.id/kultur/articles/desember-hitam-PIBW2/page/1>。いずれも2022年8月14日閲覧。本書p. 125とp. 471年表では、「声明」と記されている。

本書においてインドネシア語文献を重視するのは納得できるし、その成果は十分あがっていると思うが、オランダ語文献についてはひとまず棚上げするとしても、インドネシアに関する日本語あるいは英語の研究をもう少し本文中で参照することにより、考察を深めることができたのではないだろうか。例えば、本書にとっても重要な、インドネシアに関する事項——G30S (pp. 136–137)、タマン・シスワ (p. 86) など——について記述する際に依拠している日本語文献の大多数が一般向けの教本的書籍であり、その結果、考察の精度がそがれているといわざるをえない。また、コーネル大学近代インドネシア調査プロジェクトメンバーであったクレア・ホルトによる *Art in Indonesia: Continuities and Change* [Holt 1967] を著者自身重要な文献として参照したと述べている (pp. 30–31) が、本文中の考察には活かされていないのが残念である。タマン・シスワで教育を受けたことが、画家たちをプルサギというサンガールの集団形成に向かわせたという指摘の際にインドネシアの歴史家 Antariksa [2005] だけを参考文献として提示している (p. 87) が、タマン・シスワに関連してホルトは興味深い指摘をしている [Holt 1967: 195–196]。本著で中心化されている『インドネシア美術史』[PPPKD 1979] と *Art in Indonesia* [Holt 1967] を、時代や政治的立ち位置を考慮に入れて、相互反照的に読み込むことによって、より深い洞察が可能になったのではないだろうか。

最後に、考察に関する改善の余地について指摘しておきたい。著者は、他の国民国家同様、インドネシアが歴史的社会的に構築されたと把握している (pp. 35, 49, 51)。しかし、インドネシア文化やジャワ文化を無条件に非歴史化、本質化している箇所もみられる (p. 434 など)。「インドネシアの精神性」についてもしかりである。民族や文化の構築性に関する議論は単純ではないが、その点に関しもう少し分析的なまなざしが必要であろう。そのようなまなざしは、第十二章で著者が依拠した歴史家 Antariksa [2016] の見方を分析的に考察する可能性を拓き、本書の理論的貢献を増大させただろう。

また、不用意な考察が少なからずある。例えば、同世代の親族を表すのにインドネシア語では性の

違いを区別しないで、年上を表す「カカッ kakak」と年下を表す「アディッ adik」しかないのは、インドネシア語がおおらかであり、インドネシア人がおおらかだからだ (p. 440)、といった議論の仕方である。こういった点は改善が強く望まれる。

以上のように、改善すべき点は少なくないが、本書は冒頭で述べた3つの目的のうちの2つ、民族誌を書き、資料を提示するという目的は果たしていると思う。では、インドネシアの事例から「現代美術とは何か、現代美術の社会的役割とは何か」に答えるという目的はどうだろう。「本書で検討したインドネシアの事例から『現代美術とは〇〇であり、その社会的役割は△△である』といえる」という命題的回答を本書は与えていない。

現代美術についての著書は往々にして、自らが現代美術リテラシーをもっているという確信のない多くの読者——評者もそのうちの一人だが——にとって晦渋であると感じられると思うが、本書は分かり易い。その要因の一つは、著者自身の作品も含め、インドネシアの現代美術の作品内容の詳細、作品の意味、作者の意図などにはほとんど触れていないことにあると思う。インドネシアで17年間、全体では約30年の美術家としての著者の経歴から考えると、諸作品に対するそのような態度は禁欲的であるといってもいい。この姿勢は、美術家であるにもかかわらず、ではなく、美術家であるからこそとられた積極的な一面をもっているのではないだろうか。本書は、インドネシアの現代美術の内包だけでなく外延も明示していないが、明示することが不可能であり不適切でさえあることを、全体の記述をとおして示唆しているように思う。なぜなら、インドネシアの現代美術および関係する多くの人々の行動は常に変化し続けるものであるにもかかわらず、内包と外延を提示することは、それらの静止虚像を研究の名のもとにつくってしまいかねないからである。本書はそれを積極的に避け、極めてダイナミックな実像に迫ろうとすることにより、本書を熟読する読者に、自らの研究を振り返る契機を与えてくれる潜在力をもっていると思われる。

最後に、本書のもつ不思議な余韻について触れておきたい。地域研究者にしる文化人類学研究

者にしろ、関連する研究を押さえたうえで長期フィールドワークに赴き、現地の人々の生の生活に触れて自らの視座の転換を経験し、予定期間の終了とともにホームにもどる。研究者として自立するためには、先行研究との関係のなかに自らの研究を位置付けた民族誌を書く。著者の現地での経験も、民族誌としての本書も、以上のような定石からは外れている。著者は、2010年に帰国後、2013年に南山大学に修士論文を、2016年に名古屋大学に博士論文を提出するという制度上の定石を、博士論文〔廣田 2016〕では民族誌の定石を踏まえているのが分かる。つまり、「現在進行形のインドネシア美術の『今』を句のうちにまとめておきたい」(p. 22) という思いに突き動かされ、「読者には私の見聞を読んで体験していただけるような記述を意識的に交えた」(p. 23) という本書は、あえて定石を外している。

美術家の友人たちの息遣いを感じながら現代美術の動態を直接体感したいと思い、バリとジョグジャカルタのホーム<sup>我が家</sup>で美術家として暮らした17年は、オートエスノグラフィーを書くのにも十分な長さかもしれない。しかし、著者は同時に、日本のホームに帰るといふ潜在的選択肢をもった独りのよそ者としても生きていた(pp. 22, 463)。2005、6年頃に起こったアート市場の隆盛とソーシャルメディアの発達により、かつてはカネはなくとも共に語り合う時間はたっぷりあった仲間たちとの直接の交流が少なくなるにつれて、潜在的選択肢が顕在化していき、天寿を全うした愛犬の死がインドネシア滞在の終止符となった(pp. 21-22)。以上のような生きることの等身大の切実さが、定石の現地調査や民族誌ならば掬い取らない「現実の生の不可量部分」〔マリノフスキ 2010: 60〕の経験を掬い上げているように思う。そのような経験の記述と写真が本書にはちりばめられ、不思議な余韻を残し、著者や本書に登場する人々の生の切実さが読者自身のそれに緩やかにつながってゆくように思われる。

(青木恵理子・龍谷大学名誉教授)

#### 参考文献

- Antariksa. 2005. *Tuan Tanah Kawin Muda: Hubungan Seni Rupa-LEKRA 1950-1965*. Yogyakarta: Yayasan Seni Cemeti.
- . 2016. *Nyantrik as Commoning*. In *A Reader QalQalah*, pp. 9-18. Paris: Betonsalon - Center for Art and Research; Villa Vassilieff; Kadist Art Foundation.
- 廣田 緑. 2016. 「インドネシア現代美術と美術家——つくる・買う・支援する主体をめぐる民族誌」名古屋大学大学院文学研究科文化人類学専攻博士論文.
- Holt, Claire. 1967. *Art in Indonesia: Continuities and Change*. Ithaca and London: Cornell University Press.
- インドネシア国立文書館(編著). 1996. 『ふたつの紅白旗——インドネシア人が語る日本占領』倉沢愛子・北野正徳(共訳). 東京: 木犀社(原著 Arsip Nasional Republik Indonesia, ed. 1988. *Di Bawah Pendudukan Jepang: Kenangan Empat Puluh Dua Orang Yang Mengalaminya*. Jakarta: Arsip Nasional Republik Indonesia.)
- Karnadi, Koes, ed. 2006. *Modern Indonesian Art: From Raden Saleh to the Present Day*. Denpasar: Koes Artbooks.
- レッジ, ジョン D. 1984. 『インドネシア 歴史と現在——学際的地域研究入門』中村光男(訳). 東京: サイマル出版会.(原著 Legge, John David. 1977. *Indonesia*. Sydney: Prentice-Hall of Australia.)
- マリノフスキ, プロニスワフ. 2010. 『西太平洋の遠洋航海者——メラネシアのニュー・ギニア諸島における、住民たちの事業と冒険の報告』増田義郎(訳). 東京: 講談社.(原著 Malinowski, Bronislaw. 1922. *Argonauts of the Western Pacific: An Account of Native Enterprise and Adventure in the Archipelagoes of Melanesian New Guinea*. London and New York: George Routledge & Sons, E. P. Dutton.)
- Proyek Penelitian dan Pencatatan Kebudayaan Daerah (PPPKD). 1979. *Sejarah Seni Rupa Indonesia*. Jakarta: Departemen Pendidikan dan Kebudayaan.

小田なら、『〈伝統医学〉が創られるとき——ベトナム医療政策史』京都大学学術出版会、2022、x+316p.

1960年代後半から1970年代前半の時期、多くの日本人（だけでなく、西側の他の多くの諸国でも）にとって、「ベトナム」は冷静ではいられない響きをもっていた。まさにザ・ベトナムという存在であり、そのベトナムがアメリカ帝国主義によって南北に分断されている、その民族統一こそ「正義」ということだった。今から振り返れば、それは前世紀、社会主義の最後の「華」でもあった。それにたいして本書では、医療政策史という道筋を介して、かつての「大文字」のベトナムではない、その「小文字」の、等身大の歴史が語られることになる。

近代世界の医療史の根幹をなす現象は、西洋の医療が、帝国主義と表裏一体になって、非西洋世界において展開したことである。いわゆる、「帝国医療」である。19世紀以降、ベトナムでも植民地化にともなう西洋医学の導入があり、そうして伝統医療と西洋医療という、どこでもみられる二項対立の状況が生まれたのだが、ベトナムの「伝統」医療はけっして一元的なものではなかった。これも元々は「外来」の中国医療が厳然と存在していたのである。そして本書でもっとも印象的なのは、西洋医療対ベトナム医療ということよりも、むしろベトナム医療が西洋医療に帰依することによって、中国医療からの脱却を果たそうとすることなのである。それは大きくみれば、ベトナムのナショナリティ生成物語の重要な一環だった。

ベトナムでは、中世のある段階から中国の影響から脱して「現在の版図まで拡大する過程」(p. 23)が展開し、その過程でベトナムというナショナリティが生成されていった。その場合、中国にたいして対峙される「ベトナム」とは、中国からより遠い「距離」にある「南国」(pp. 25, 285)に存在する、とされた。こうしてベトナムの国家形成とは、より「先進」的な「北」が、より「後進」的な「南」を併合してゆく「南進」(p. 23)というかたちをとることになった。

小田氏の研究は、そのような歴史の大きな流れが医療の世界にどのように投影されたのかを追うことになる。すでにみた中国医療の存在ゆえに、前近代のベトナム医療においては、外来医療・エリートと、土着医療・一般民衆という二重構造がみられた。「陰陽五行思想」をベースにした治療をおこなう「儒医」と「農民の治療師」という構図である (pp. 100–101)。そして医薬品の世界も、それに対応して二重構造になっていた。すなわち、中国の薬 = 「北薬」とベトナムの薬 = 「南薬」である。

19世紀、ベトナムはフランスの植民地になり、西洋医療という、もうひとつの外来の医療体系の導入をみた。その結果、対中国という構図と対西洋という構図が重なり合うことになった。そして小田氏の記述でとくに興味深いのは、西洋医療 = 「西薬」の登場によって、「南薬」が「北薬」と相対峙する地位に引き上げられることである。植民地化の進行にともなって、「フランス語で教育を受けた新学知識人」(p. 53)が輩出された。その彼らが、「南薬の効用」を唱え始めたのである。その場合、西洋医療 = 西薬に「対峙」するというのではなく、「西洋医学の論理」によって南薬は、北薬と「対抗」しうることを証明しようとしたのである (pp. 78, 82)。言わば、毒を以って毒を制すの構図である。

その営為の延長線上に、ホーチンミン・医療「神話」がある。1945年のベトナム8月革命の前夜、高熱で苦しんでいたホーチンミンが、「少数民族」の薬草によって快癒したという逸話である (p. 134)。そうしてホーチンミンは、「西薬」にたいして、北薬と南薬をひとつのものとする「東薬」、そして「東医」という概念を打ち出したのであった (p. 95)。<sup>1)</sup> 小田氏によれば、「ベトナム、北ベトナムの人民軍、南ベトナム解放民族戦線が戦場としたベトナムの森林は、薬料『発見』の場でもあり、『東医』が発展する大きな契機となる場でもあった」(p. 134)。

1) ガンディーと比較してみると、おもしろいとおもう。デイヴィッド・アーノルド、『身体の植民地化——19世紀インドの国家医療と流行病』。見市雅俊（訳）、みすず書房、2019年、277頁以下。

そしてベトナム戦争に従軍した医師の日記の分析などを踏まえて、小田氏は次のように書く。

戦場は日記の記述の通り、キン族（人口の85%を占める「多数派」）が少数民族の薬草利用法と出会う場でもあった。日記によると、少なくともタイ族とモン族も部隊に所属し、ともに医療活動をおこなっていた。従軍していた医師らは西洋医学の教育を受けていたが、医薬品が容易に入手できない非常時の状況下では、身近にあるものを最大限活用することが求められた。……（そこで）身の回りにある薬草を利用する知識を「発見」し、伝承していくこととなったのである。（pp. 138-139 —括弧内は引用者）

「西洋」（と中国）に対峙する、「原」ベトナム＝自然＝少数民族（ネイティブ）＝薬草という、まことに綺麗なイメージの連鎖であり、ザ・ベトナム時代にくつも紡がれた「民族美談」のひとつではないか、というのが第一印象である。小田氏は、「共産党の公定史観」（p. 11）とは距離を置くとするのだが、この「銃口から生まれる」のくだりは、少数民族の貢献のこともふくめて、あまりに無批判的な叙述ではないだろうか。それと、ベトナムの全人口の15%を占めているという「公定（少数）民族」についての立ち入った記述が、ほとんどないことも指摘しておく。<sup>2)</sup>

小田氏によれば、北ベトナムでは国家統制のもとで、西洋医学医師が主導して、「東医」の「制度化」、そして「科学化」が進行した（pp. 186, 140, 272）。それまで、対中国・対西洋医療にたいして「多様」だった「民間」療法のありようを「一元化」し、そのうえで国家管理下で「正統性」を賦与しようとしたのだった（p. 274）。薬草と鍼灸を中心としたその実践活動も詳しく紹介されている

（p. 121 以下）。しかし、小田氏によれば、「『西医』と『東医』の知識の統合」は、そうした地道な努力ではなく、「戦場における切迫した状況下において……なされていたのである」（p. 141）。やはり、「銃口」神話ということだ。

その北ベトナムと相対立した南ベトナムについても、かつての「傀儡」イメージを払拭したうえで目配りがなされ（p. 146 以下）、南ベトナムでも東医の復権と制度化が進行したことが指摘される。南北ベトナムの相違を小田氏は次のようにまとめている。

南ベトナムでは……「東医」と「西医」の領分を区切り、東西医双方の共存が模索されていた。西医が主導する「東医」の制度化を、中央の研究機関設立と同業者団体の統制から始めた北ベトナムとは対照的である。（p. 280）

この南北の違いの一因は、華僑が圧倒的に南に偏在し、その華僑が「伝統薬の流通において力を持っていた」（p. 158）ことだった。そして「コラム」のかたちで、現在のベトナムにおける中華系住民の医療と薬売りのありようが詳しく紹介されている。一点いえば、南北時代と統一時代との狭間に起きた「ポートピープル」のことがすっぱり抜け落ちている。タブーということだろうか。

本書の枠組みの延長線上でいえば、「南進」の完成が、あの劇的な1975年のサイゴン陥落だった。そうして誕生した統一ベトナムでは、「東医」に替わって「民族医学」という表現が「多用」されるようになった（p. 186）。小田氏によれば、「民族医学」とは、「多民族国家統合」の「象徴」であり、「ベトナム社会主義共和国の国民創出」のひとつの道筋だった（p. 197）。そうして、「東西の医学が結合した新たな医学」（p. 275）が国家プロジェクトとして探求されることになったのだが、そのような「民族医学」の創出努力は皮肉にも、「伝統」的な、「民間療法」の「自由な治療の実践を困難に感じさせる圧力」ともなった（p. 204 以下）。

そして20世紀末のドイモイ。ベトナムは、ザ・ベトナム＝「発展途上国」から「中所得国」に変貌する（p. 8）。そこでは、勇壮な「民族医学」と

2) 「バー・ム」（産婆）の「再教育」プロジェクトに、「国語」の問題がからんでいることが指摘されているが、立ち入った分析はない（pp. 61, 65）。ちなみに、インドでも「ダーイー」（産婆）の再教育が試みられた。アーノルド、前掲書、249頁以下。

いう名称に替わって、「伝統医学」という微温的な呼称が用いられるようになった (p. 276)。「市場経済」的に、一般の人びとのニーズにこたえて、「東医」への「回帰」が進行した (pp. 213, 277, 287)。本書の文脈に沿うならば、「北」ベトナムの「南」ベトナム「回帰」ということになるのだろうか。

それでも現在のベトナムは、「伝統医学」と西洋医学＝「現代医学」の「統合」を目指すという国是を捨てたわけではなく、伝統医学専門職の養成が続けられており、第5章、「『伝統医学』教育と医師養成—理論化の困難と創造される実践」では、養成現場の密着取材がおこなわれ、その教育内容が詳しく紹介されている。現代科学になかなかなじみそうにない伝統医療のありように医学生がとまどっている様子なども紹介されていて、興味深く、現場の声がよく聞こえてくる内容になっている。

専門雑誌に掲載された複数の論文をまとめて博士論文とし、さらにそれを大幅に改稿したのが本書である、とあとがきにあるが、全体のまとまりがよいとはけっして言えない。すでに指摘したことだが、「南薬」文化の担い手とされる少数民族の扱いがおおざなりであり、さらに「南部」の「東医」においては「宗教団体」が「大きな存在」だったとあるが (p. 193)、それもほとんど説明がない。著者は現代ベトナムでの伝統医療について精力的なフィールドワークをおこなっている。そのような医療人類学的な視座とベトナム政治史の視座とを融合させ、さらに「一般」読者向けの「サービス」にも心掛ける。まだ若い研究者。今後、そのような点を念頭に研究されることを期待したい。

(見市雅俊・中央大学名誉教授)

布野修司、『スラバヤ 東南アジア都市の起源・形成・変容・転成——コスモスとしてのカンボン』京都大学学術出版会、2021、xvii+583p.

タイトルから本書を単なるスラバヤの都市史と誤解してはいけない。たしかに著者は、インドネシア第二の都市スラバヤで「都市の中のムラ」と

も形容される都市内の自然発生的な集落であるカンボンを、日本の建築分野ではじめて本格的に研究した人物である。だが、本書の射程はスラバヤやカンボンを優に超えている。むしろ本書は、建築学者としての著者の半生が丸ごと詰まっているとあってよい。

インドネシアでカンボン<sup>1)</sup>を研究する評者からすれば、著者の背中中は常に追うべき存在である。しかし、追いつこうにもその背中がいつも遠くに霞んでしまうのは、著者の研究対象が常に拡張を続けるからだ。博士論文をもとにした『カンボンの世界』(パルコ出版)を1991年に出版した後、2000年代には『近代世界システムと植民都市』(2005)、『曼荼羅都市』(2006)、『ムガル都市』(2008)、『大元都市』(2015、いずれも京都大学学術出版会)と大著を立て続けに出版する。それらは、植民都市、ヒンドゥー都市、イスラーム都市、中国都城と、それぞれ異なる都市類型を詳細に解剖した非常にスケールの大きな研究である。

しかも、その研究はすべてスラバヤに端を発している。まず、スラバヤ生誕の日は、ジャワ最後のヒンドゥー王国であるマジャパヒト王国によるモンゴル軍撃退の日とされる。そして15世紀にはジャワの沿岸都市として早くもイスラーム・ネットワークに組み込まれる。さらに17世紀にはオランダ東インド会社の進出を受け、以後、植民都市へと徐々に変容していく。日本占領期を経て、インドネシアは独立に至るが、スラバヤでその画期となったのは1945年11月10日の独立闘争である。そして独立後のスラバヤは、増え続ける人口を大量のカンボンが支える巨大都市へと変貌した。つまり先の都市類型すべてにつながるキーワードがスラバヤの歴史に含まれている。この拡張力が著者の真骨頂だろう。

そもそも著者の出自は建築計画学であって都市史ではない。51C型という住宅公団の標準形平面を開発した吉武泰水や鈴木成文らの下で1970年代に学んだ。いわば住まいの未来を考究していた人物が歴史へと関心を広げたのである。だが、それ

1) インドネシア語に倣えばカンブンの表記が適切かもしれないが、ここではカンボンで統一する。

はきわめて自然なことでもあった。1979年にインドネシアではじめて出会ったカンボンに著者が魅了されたのは、そのような背景を持っていたからこそだ。それは以下の理由による。

戦後、建築計画学が取り組んできたことは、さまざまな実例から「食寝分離」など現代の暮らしの原則を導き出し、それらを満たす最適な住宅モデルを考案して供給することであった。都市住宅の不足を、公が規範を示しながら補っていくスタイルである。

他方、カンボンはそのような計画的供給とは正反対の存在である。公による住宅供給が十分に機能しないのを、民によるボトムアップの自発的な建設が補完した。それが著者を驚かせた。というのも、カンボンは標準化がもたらす画一化とは無縁だったからだ。しかも人々の暮らしは住居単体に収まらず、近隣にまで広がる。住宅建設も相互扶助など地域住民のつながりでなされる。住居単体で住まいが成り立っているのではなく、住居の集合が住まいを支えているのだ。「(51C型)住居集合の全体を問題にしてこなかった」(p. 480)と批評的に著者は述べているとおり、従来の住まいの計画学に何から何まで問い直しを迫るのがカンボンだったわけである。

そこから本書の研究が生まれた。スラバヤのカンボンをきっかけに、まずは住居から住居の集合へと関心を広げ、そこからスラバヤ全体を捉える都市の視点へと飛翔した。さらに今度はスラバヤという都市の原理をたどるべく、歴史へと深く潜っていった。それが著者の軌跡である。

以上のように著者の軌跡をここで改めて紹介したのは、それを把握していると、本書の構成が理解しやすくなるからである。それでは本書の構成に話を移そう。

本書は以下の4章に序と結が加わる。

- 第1章 スロとボヨ
- 第2章 スナン・アンベル
- 第3章 オランダ
- 第4章 スラバヤ11月10日

そして各章の副題として「起源」「形成」「変容」

「転成」がそれぞれ付く。つまり、各時代のスラバヤを象徴する伝説、人物、国家、出来事をタイトルに、スラバヤの起源から転成までを描く構成をとる。主軸はスラバヤ史であり、本書のタイトルどおりである。

だが、各章には本論とはやや独立した形でSpace FormationとCascadeと名付けられたパートが挿入される。Space Formationとは、空間や都市形態、建築の観点からスラバヤさらには東南アジアの都市の起源・形成・変容・転成を述べるパートである。本論が「時間—歴史」なら、Space Formationは「空間—形態」だと著者は位置づけている(p. 6)。具体的には、第1章ではデサ(村落)について、第2章ではアルン・アルン(都市核)について、第3章ではヘメーテ(自治体)について、第4章ではカンボン(都市村落)について取り上げる。

他方Cascadeは、スラバヤの歴史を東南アジア史や世界史などのより広い文脈に位置づけるためのパートである。ジャワのインド化、モンゴルの侵攻、イスラーム・ネットワーク、植民都市、51C型などについての説明である。これらはスラバヤが同時代の他の都市の現象とどのように関連しているのかを示すいわば巨大な注釈である。スラバヤの出来事を単なるスラバヤの事象として終わらせるのではなく、世界史として描くための工夫である。

すなわち本書は、スラバヤの歴史を軸にしながら、建築や都市空間、形態論を語るとともに、スラバヤの歴史を東南アジア史、世界史に接続する。スラバヤに関連する建築や都市史、東南アジア史、世界史をすべて詰め込むような野心的な構成をとる。それは著者の研究の軌跡の現れでもある。

だが、Space FormationやCascadeが本論を凌駕してしまっているがゆえに、スラバヤの都市史を期待して本書を手にした読者は、やや迷路に入り込んでしまうかもしれない。その時は、上述した著者の歩みが結にまとめられているので、それを先に読むことで本書の羅針盤を得るだろう。

以上のとおり、各章は本論／Space Formation／Cascadeの3つが入り組んだ構成をとる。そのため、各章の内容をここで簡潔にまとめることはとてもできない。その代わりとして本稿では、著者の専

門性が発揮された Space Formation を中心に各章の要点を評者なりに整理したい。

第1章はスラバヤの前史が主題である。そのため、ジャワのインド化を本論では扱い、Space Formation ではカンボンの起源にあたる村落を扱う。その中で、村落を意味する用語であるデサ・カルラハン・カンボンの関係を整理した箇所は学ぶところが多い。村落の呼称は、ジャワではデサ、スダではカルラハンが使われ、さらにスダではカルラハンを構成する居住のまとまりをカンボンと呼ぶという。また、空間的にはジャワのデサは囲い込みがあって領域性が強いものに対して、カルラハンやカンボンは囲い込みのない領域性の弱い村落形態だと指摘する。つまり、カンボンはカルラハンの一部であり、カルラハンも自己完結した領域ではない。したがって、カンボンにしてもカルラハンにしてもそれらで表現される村落は、デサと比べると全体の一部としての性格が強いといえる。現在、都市部では最小の行政区を指す用語はカルラハンと同根のクルラハンであり、カンボンは都市内の居住地を指す。すなわち、クルラハンとカンボンは共に都市を構成する部分集合を指す用語であり、それがスダの村落表現と矛盾なくつながっている点は興味深い。

第2章はスラバヤへのイスラーム・ネットワークの浸透が主題である。そのため、Space Formation ではジャワ・イスラーム都市の空間構造を扱う。その特徴は、王宮やモスクがアルン・アルン（広場）を囲む構造にあるが、現在のスラバヤにその痕跡はない。しかし、既往研究や古地図、地名などから、アルン・アルンを中心とする類似の空間構造が17世紀以前のスラバヤに存在していた可能性を本書は提示している。その痕跡はたしかにいまでは消えてしまっているが、例えば同地区には英雄記念塔の広場があり、正確な位置は異なるが、アルン・アルンのような都市の中核をなす広場が時代を超えて出現しているのに何らかの因果を感じずにはいられなかった。

第3章は、17世紀にはじまるオランダ東インド会社の支配からインドネシアの独立までのスラバヤを描く。ただしSpace Formation では、18世紀の都市空間を第2章で扱っているため、本章は1825

年以降の近代植民都市への変容に焦点が絞られている。植民地期の地図や建築図面が豊富に残り、既往研究も充実しているこの時代とあり、鉄道や港湾などのインフラ開発から蘭印の建築家による個別の作品に至るまで、インフラから建築までの重要事項が余すところなく取り上げられている。一時はバタヴィアを凌いだスラバヤだけあり、バタヴィアの都市開発とシンクロするところも多い。20世紀前半の蘭印の都市や建築を学ぶ上で貴重な章である。

第4章は独立以後のスラバヤが主題である。したがってSpace Formation は、著者がおよそ40年にわたって研究、観察してきたカンボンを重点的に扱う。ナショナリズムの誕生から独立、スカルノ、スハルト体制を経て現在に至るこの時期の都市史にやはりカンボンは欠かせない。政府の都市計画や住宅政策だけでは、スラバヤなどのインドネシアの大都市は機能不全に陥っていたに違いないからだ。公の規制が弱く中で、民衆の自発的な建設によって広がったカンボンが住宅の不足を補った。カンボンは計画があつて建設があるというプロセスを踏んでいない。にもかかわらず居住地が自由さと秩序を保ちながらいかに形成され、変容し続けているのか。実地調査の豊富な成果をもとに、カンボンの街区構造や住宅の増改築プロセスをもとに解明する。本書には所々にQRコードが付されているが、本章のそれにアクセスすると、臨場感あふれる現地のカンボンの様子を視聴できるのもありがたい。

カンボン形成の仕組みと並行して、カンボンの知見を都市計画や建築計画がいかに吸収してきたかも本章では述べられている。例えば、既存のカンボンを撤去することなく公的な資金を投入してそれを改善するカンボン・インブループメント・プログラム（KIP）やカンボンの空間構成に学んだルスン（公共集合住宅）の開発、著者らが提案したスラバヤ・エコハウスなどが取り上げられている。カンボンに建築計画学の希望を見た著者ならでの切り口だろう。

以上、各章のSpace Formation を駆け足で見えたが、空間や形態と結びつけてスラバヤを語るどころに、やはり読者は多くの学びを得るに違いな

い。本書をとおして空間や形態の視点が東南アジア研究に挿入されることで、東南アジア研究に一層の広がりをもたらされるだろう。だからこそというべきか、Space Formationがやや付加的な扱いなのは残念である。むしろそれが本論となる構成もありえたのではないだろうか。

とりわけ、カンボンの特性やカンボンを取り巻く政策を取り上げた第4章は大変貴重である。著者の40年自体がカンボンのアーカイブでもあるからだ。しかしその一方で、本書ではカンボンがトップダウンの政策や計画に対してやや二項対立的に位置づけられているのは気になるところだ。著者自身が第4章で示したとおり、KIPやルスンにはボトムアップの取り組みを吸い上げたところがある。ただし、ボトムアップ的といわれるKIPでも、実際の工事は自治体から派遣された労働者で、住民参加とは言いがたい事例もジャカルタではしばしば耳にする。つまり両者の関係は複雑だ。カンボンを公権力のオルタナティブと位置づけてばかりもいられない。

さらに言えば、標準化や住宅政策からカンボンが遊離しているわけでもない。インドネシアの公共事業省や国営住宅公社(プルムナス)は、日本と同様に戦後に間取りの標準化を試みたが、著者が記録しているカンボンの住宅の間取りにはそれらとの類似が見られる。また、インドネシア政府が考案した間取りは、植民地期のオランダの官舎や労働者長屋などとの共通性が高い。植民地支配と戦後の庶民住宅とを切り離すこともできないだろう。例えば評者は、恒久住宅と呼ばれるレンガやコンクリートブロックなどの不燃材料を用いた住宅が、オランダ時代を起源として現在まで政府によって推奨されてきたことを指摘したことがあるが[林 2016]、大都市のカンボンの住宅はいまではほとんどが恒久住宅である。強い規制がなくとも、政府による標準化や植民地支配がもたらした住宅の価値体系はカンボンにまで浸透している。あるいは逆に、カンボンがそれらを飼い慣らして

いるといった方がよいかもしれない。そのような現象が生じるのは、カンボンに住む人々が、例えば労働者としてはフォーマルな建設現場にも接続する存在だったからではないかと評者は見ている。著者はコスモスとしてのカンボンという表現をするが、カンボンを閉じた宇宙と見ない視点も重要だろう。

本書で著者は、40年の時を経て、カンボンにはすでに居住歴の長い住民が増え、カンボンを地元とする世帯の割合も大きくなっていると指摘する。もちろんこれまでカンボンの撤去は各地で起こってきたが、それでもKIPなどの効果もあってかカンボンは数多く残存し、その結果、ある意味で成熟したコミュニティが形成されつつあるのかもしれない。その変化は今後スラバヤ、あるいはインドネシアの都市にどのような影響を与えるのだろうか。著者の歩いたカンボンを今度は読者が歩きながら、その行方を観察する機会を本書は与えてくれる。

ところで、全体をとおして誤字脱字が散見された。本書の副題にある「転成」が、第4章のタイトルでは「転生」になっているなど、気になる人も多いのではないだろうか。大著であるだけにそれで評価を落としてしまうのは勿体ない。インドネシアの都市や建築についてここまで包括的にまとめた日本語の文献はないのだから。

本書を読んで、やはり著者の背中はずいぶん震わばりである。だが、それでもなおそれを追って、何か新しい1ページを書き加えていきたいと思わせてくれる書籍である。

(林 憲吾・東京大学生産技術研究所)

#### 参考文献

- 林 憲吾. 2016. 「序列化する建材——インドネシアの恒久住宅」『衝突と変奏のジャスティス』(相関地域研究3) 谷川竜一; 原正一郎; 林行夫; 柳澤雅之(編), 161-185ページ所収. 東京: 青弓社.